

小葉田淳監修・福井県（総務部県史編纂課）編

『福井県史』資料編16上

絵図・地図

絵図とか地図と呼ばれる類の「図像資料」をまとめて、都道府県史の付録とか別録付図として刊行した先例は、ないわけではない。しかし、本書のようにこれを独立の一巻とし、精細な解題、単なる解題の域を超える多くの新しい解釈・考証を添えて、絵図・地図をくわしく読むことのおもしろさとか意味、また、するどい解説によって新たな資料価値を引き出す醍醐味などを示すことに力をつくした例を見るのは、初めてのことでないか。これが、B4版で二〇頁に及ぶ刺激的な解題・解説に導かれつつ、五五点の複製絵図・地図類を仔細に鑑賞し終えた時の、いつわらざる感想であった。

収載された複製図類五五点は、次のようなものから成る。冒頭に葦置村と道守村の

著名な開田図各一点。次に、越前および若狭の国絵図類六点。福井城下図二点をはじめ、松岡・府中・丸岡・大野・勝山・鯖江・小浜・敦賀・三國浦、そして熊川山絵図との表題を付されたものまで、城下図・町図類合わせて一四点。佐柿村絵図以下、村絵図五点。山論裁許絵図・塩田絵図・若狭湾漁場図各一点。吉崎御坊と門前町絵図・永平寺寺境絵図各一点。九頭龍川・日野川・足羽川・舟川の川絵図各一点。以下明治以降のもので、福井県全域の管内図・二〇万分の一図各一点。二万分一地形図三点。福井市街図一点。地籍図五点。同一地点の新旧空中写真を対比的にとりあげたもの、四カ所八点。

一口でいえば「資料の歴史的・地理的視点からみた重要性、文化財的価値、複製したものが見やすさ・美しさ、さらには地域的バランス」を考慮した上での選定（本書「凡例」ということにつきようが、数ある絵図・地図類の中から精選してこれだけの点数にしほりこむ配慮は並たいていではなかったに違いない。そのため、各図の解説は、多くの場合まず、なぜその図を複製収載したかの説明から始まる。全国的な位置

づけにおける収載理由や、同種・同系統の諸図との異同対比作業の果ての収載理由もあれば、保存状態、撮影の可否、さらには『福井市史』との調整による選択といった理由もある。いわば編集会議の内部事情というべきところまでさらけ出された収載図選定理由の記述は、しかし結果的に、収載図成立事情や絵図・地図史上の意味を読者に強く印象づけるのであって、たくまざる効果をあらわしているといつてよい。

しかし、本書のもっとも魅力的なところ、価値の高いところは、昭和五十八年ごろから、数年をかけて積み上げられたに違いのない、記載内容の細部にわたる綿密な検討結果の、数々の新知見の記載と、あざやかな着想による新解釈、新説の提示にある。例えば、第三図として複製収載された慶長十年頃の「越前国絵図」では、丹生北郡白滝村のところに記された石高が、実は隣村の滝波村の石高であることや、南仲条郡大門村の石高として記載された石高二六石六斗八升九合という数字が、実は十の位の数字が抜けていて、正しくは二一六石六斗八升九合であることなど、一つ一つの村名・村高を克明に、しかも極めて注意深く検討し

なければ到底見出し得ない微細な誤りが指摘される。これなどは、読者をして思わず「誤記さがし」を試みたいと思わせるほどの、つまり細かな記載内容への没頭を促すほどの誘い水になるような、そんな解題となっている。また例えば、第六図として収められた「若狭敦賀之絵図」は、若狭の国絵図の中で最も古く、最も大きく、且つ内容が詳細であるという点で、特に貴重な正保二年（一六四五）の国絵図である。にもかかわらず、従来は、これが元禄の国絵図ということで通っていた。それは、この図がかなり破損した状態で折り畳まれて「元禄国絵図」（一六八八）という表題のある袋に収められていたからであるが、このたびの編纂に係わる史料調査によって、（一）記載石高が正保郷帳の石高と一致すること、（二）寛文二年（一六六二）の地震後にできた三方湖と久々子湖を結ぶ浦見川が記されておらず、そこがまだ恨坂となっていること、（三）浦見川開鑿によって成立した生倉村と成出村が記載されていないことなどが確実にチェックされ、実は正保の国絵図であったことが明らかにされたというケースもある。

福井城下図でも、みごとな発見がある。それは、貞享（一六八五年）の城下図と、正徳（一七一四年）城下図の関係の解明において、とりわけあざやかである。簡単に言えば、正徳図は、貞享図の上に紙を置いて写したものであることが解き明かされるのである。こう言ってしまうれば何の造作もないことのようにあるが、一辺三メートル内外の大図を見ていてこのことに気がつくのは、並のセンスではない。この着想を立証するために、「同一距離から大型カメラで撮影した写真の四ツ切プリントを試みに重ね合わせて透視する」という手続きをとる。そうすることによって、城郭の結構・濠・街路・町割のみならず、曲線的な川や山の形状、さらには、四辺中央に記された東西南北の文字やその位置、「愛宕山」を「愛宕山」と誤記した、その誤記までも一致する事実を見つけ出す。かくして、要するに正徳図は、貞享図を引き写しつつ、その後の変化、あるいは正徳期の現況を「御城下惣町間教帳」や「御城下絵図別記」などの資料や、恐らく実検などに基づいて修正されるという方法で描かれたものであることを明らかにしている。福井城下絵図史を書

き変えるだけでなく、各地の絵図史を再検討する場合の基本的な視点を鮮明に示した点でも、この考説は、本書中の白眉であろうと思う。調査・執筆者の興奮が行間に読めるというだけでなく、読者にとっても刺激的な内容であるといわなければならぬ。このように例を挙げればきりが無いほど、本書は、全編、新見解に満ちているのである。宝曆二年（一七五二）ころまで遡ることができるという見解がほぼ定説であった「永平寺寺境絵図」の作成年代を、図中の山門と二王像の絵の検討などを通して、定説より七五年ほども遡らせた仕事も、すぐれた考証事例に加えられるべき一つである。

紹介者の願望を言えば、複製図の文字などを活字化したような、いわば「釈文」が添えられていれば、一般の人たちにより理解しやすいものになったのではないかと思うが、編集方針の最重点が、原図にできるだけ忠実な複製図を示すというところにあるのだから、紹介者の願いは望蜀の願いに過ぎないだろう。複製のこまやかな配慮は、原図に彩色されているものはすべてカラー図版で、且つ和紙が麻布に描かれているも

のは和紙を、原図が洋紙のものは洋紙を用いるという、紙質選択の配慮に及び、読者はほとんど原図を眺める思いにひたることができる。

調査・執筆にあたったのは、大阪大学の金坂清則、県史編纂室の海道静香両氏である。共に歴史地理学、地図史に詳しい慧眼の士であるが、それにしても、本書に費された労苦はたいへんなものであったと想像できる。絵図を前にして考えることの意味と成果を浮き彫りにした大冊の刊行を多としたい。

(B4版 一三二頁 複製図五五葉 一九九〇年二月 福井県 一一、〇〇〇円)
(足利健亮 京都大学教養部教授)

会 告

平成二年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日(金)午後一時より楽友会館において開催されました。

公開講演は紀平英作、江口圭一の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終わりました。

全国産業復興法とニューディール

紀平英作氏

十五年戦争とアヘン

——当事者の証言——

江口圭一氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成二年度会務報告がなされました。

平成二年度

史学研究会大会講演要旨

全国産業復興法とニューディール

紀平英作

一九二九年末から始まった世界恐慌は、アメリカ合衆国社会においても三二年から三三年の段階で、推定された完全失業者が、一三〇〇万人、実に労働人口の二五パーセントに達するという事態をもたらしていた。三三年以降、新大統領ローズヴェルトのもとに展開された一連のニューディール政策は、この不況に対するアメリカ政治の対応過程に他ならなかった。しかし、ニューディールのもとでの経済回復は必ずしも十分なものではなかった。三〇年代を通して眺めると、失業者は四〇年後半まで、八〇〇万人を下ることがなかった。こうした長期化する不況と失業の継続のもとで、ニューディールはその後半に入り、老齢年金および失業保険制度を盛り込んだ社会保障法の導入により福祉国家制度の整備へと向かい始め、さらには、全国労働関係法を採用し